

2022年度第6回研究会（通算第11回）

開催日時：2023年3月19日（日）：13時30分～18時40分

：2023年3月20日（日）：10時00分～14時45分

場所：オンライン会議室（&AA研304 マルチメディア会議室）

共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」、東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

「言語変化・変異と言語獲得」というテーマのもとで、8名のメンバーが、それぞれの分野内の話題を35分で提供し、ディスカッションおよび他の参加者の間で、15分の質疑応答や意見交換を行った。今回の発表の中には、共同研究の成果の発表が4件含まれていた。

また、遠藤喜雄氏を招聘し、「疑問文とカートグラフィ」というタイトルの講演をしていただいた。

各発表の概要は以下のとおりである。

講師1：佐野真一郎（Shin'ichiro Sano; 慶應義塾大学）

コーパスを用いた「ら抜き言葉」の分析: 音韻論的・社会言語学的観点から
(Corpus-Based Analysis of Ranuki: Phonological and Sociolinguistic Perspective)

本研究では、国立国語研究所による『中納言』から利用できるコーパスを用いた「ら抜き言葉」の数量的分析の結果を報告した。音韻論の観点からは、話し言葉と書き言葉のコーパスにおける分布をもとに、必異原理（OCP）による一致回避・分節音レベルの異化が、ら抜き言葉にどのような形で現れるかを検証した。子音の一致、母音の一致、音節の一致、変格活用動詞・使役の助動詞における一致を対象とした。分析の結果、話し言葉・書き言葉共通で、ら抜き化には一致回避のための阻止効果と促進効果が見られ、その効果は、音節の一致で最も強く、以下母音の一致、子音の一致となっていた。その他、一致回避の適用範囲が形態素境界間であることや、活用型による非対称性が示された。社会言語学的側面については、5つのコーパスを対象として、各コーパスの特徴とら抜き言葉の分布から、話し言葉・書き言葉の別、時代、発話形式、スタ

イルの影響を推測した。分析の結果、ら抜き言葉は、1) 書き言葉よりも話し言葉に、2) 古いデータよりも新しいデータに、3) 独話よりも会話に、4) あらたまった発話よりもくだけた発話に現れやすいことが確認された。また、見かけ時間分析と性別の検討から、言語変化が備える性質も確認された。

講師 2 : 下地理則 (Michinori Shimoji; 九州大学)

琉球諸語の双数形式の起源と発達過程の推定

(Dual and its historical development in Ryukyuan languages)

琉球諸語には本土方言と違い双数形がみられる方言が散見される。例えば奄美大島湯湾には wa-ttəə 「私たち (2 人)」があり、これは複数形 waa-kja 「私たち (3 人以上)」と対立する。本発表では、双数形の共時的な変異をもとに、琉球祖語に遡るとみられる双数形の起源形式を再建し、そこから双数形へと発達していく過程を推定した。本発表では、現代の諸方言にわずかにみられる特異な複数表現、すなわち 1 人称単数属格形 (「我が」) + 数詞を用いた構造体 (属格数詞構造体) に着目し、これを双数形の起源形式として琉球祖語に再建する。そして、属格数詞構造体の数詞が「2 人」の形式が双数形に変化していったとの見解を示した。

講師 3 : 小川芳樹 (Yoshiki Ogawa; 東北大学)・縄田裕幸 (Hiroyuki Nawata; 島根大学)

個体レベル所有構文としての与格主語構文の発達と FinP

(Dative Subject Constructions as Individual-level Possessive Constructions and FinP)

所有関係は、言語によって、他動詞 HAVE を使って表現される場合と、自動詞 BE+場所の接置詞を用いて表現される言語があることが知られている。Freeze (1992)は、所有の他動詞 HAVE は、それをもつ言語では普遍的に、繫辞 BE への場所の接置詞の編入により派生されるとした上で、(1a)の「場所叙述構文」、(1b)の「存在構文」、(1c)の「所有構文」の 3 構文は共通の基底構造をもつと主張した。

(1) a. その本は机の上にある。 / The book is on the table.

b. 机の上に（は）本がある。 / There is a book on the table.

c. 太郎に（は）財産がある。 / John has a car.

日本語統語論研究では、(1b)の存在構文と(1c)の与格主語構文は、表層主語が異なるとの論考はある (Shibatani (1977), Kishimoto (2000))。しかし、基底構造の同一性については、管見の限りでは、否定も肯定もされていない。

本発表では、Freeze (1992)の通言語的一般化を認めつつ、日本語の与格主語構文は、共時的には、(1b)の存在構文とは異なる基底構造をもつとの前提に立ち、以下の4点を主張した。

(2) a. 「いる／ある」に限らず、あらゆる与格主語構文は所有構文の一種である。(cf. Noonan (1992), Harves and Kayne (2012))

b. 所有構文は個体レベル述語文であり、与格主語は、TPよりも上の機能範疇 FinP の指定部に基底生成された「場面設定の場所句」である。

(cf. Diesing (1992), Rizzi (1997), Maienborn (2001))

c. [Spec, Fin]は主題卓越言語では主語位置として機能する(Nawata (2019))。

d. 通時的には、与格主語構文は存在構文から発達したものであり、鎌倉時代に登場して以降、「統語的構文化」により、現代までに、その所有構文としての頻度と変種を増やしつつある。(cf. Ogawa (2014))

(2a-c)の主張に対する根拠としては、「自分」の束縛可能性、所有者項と場所項の共起可能性、数量詞の作用域解釈、主語の定性、与格主語構文に課される意味的制限、HAVEなし言語の1つであるアイルランド語における諸事実などを指摘した。(2d)については、Sadler (2002)も類似の観察を行なっているが、本発表では、CHJとBCCWJの独自の調査に基づき、場所句存在構文から与格主語所有構文が発達してきたプロセスを示した。結論としては、Freeze (1992)の主張は共時的には正しくないが、通時的な構文どうしの連続性が当該の通言語的一般化を成立させていると主張した。

講師4 (招聘講師) : 遠藤喜雄 (Yoshio Endo; 神田外語大学)

疑問文のカートグラフィー

(The cartography of syntactic structures of interrogative sentences)

本発表では、カートグラフィー(the cartography of syntactic structures)という文法モデルを用いてさまざまな言語の疑問文を分析する。特に以下の点を論じた。

- 1) カートグラフィーの紹介
- 2) 疑問文の類型論: 標準的と非標準的
- 3) 非標準的な疑問文の特徴: 口調の強弱
- 4) 口調の強弱を調整する要因
- 5) 口調の強さを測る尺度と統語的な効果
- 6) 言語発達への示唆; ASD

まず、カートグラフィーとは何かを自らが行なってきた研究をもとにしながら、具体例を用いてわかりやすく紹介した。次に、疑問文は、大きく聞き手から答えをもめる標準的なタイプとそうでない非標準的なタイプとに分かれることを見た。そして非標準的な疑問文は、話し手の聞き手に対する口調の強弱を持つことを見ながら、その口調の強弱を調整する要因やメカニズムを論じた。さらには、口調を強める疑問文には攻撃性に関わる素性があることを指摘し、その素性を持つ疑問文が弱い島(weak islands)を逃れる効果を持つことを示した。最後に、口調の強さという視点から自閉症スペクトラム者が持つ言葉の問題を眺めることで理論言語学の研究が社会に貢献できる可能性を探った。

講師 5 : 石崎保明 (Yasuaki Ishizaki; 南山大学)

英語における *spray* クラス所格交替動詞の歴史的発達について

(On the historical development of the so-called *spray* class locative alternation verbs in English)

現代英語 (PDE) の *spray* は *load* とともに所格交替を示す代表的な動詞として知られているが、*spray* は後期近代英語期(LModE, 1700-1920)ではほとんど動詞としてさえ使われていなかったことが分かっている(cf. 小川・石崎・青木(2020))。他方、LModE 期の *load* は、もっぱら場所目的語構文 (e.g. *load the truck with hay*) の中で用いられており、物材目的語構文 (e.g. *load hay onto the truck*) としてはほとんど用いられていなかった。つまり、これら 2 つの代表的な所格交替動詞は、ともに LModE 期では PDE のような所格交替を示しているとは言えない状況であったということになる。

動詞 *spray* において興味深いのは、これが動詞として使われ始めた PDE には早々に 2 つの交替形に生起可能となっていたという事実である。

これをもとに、本発表では、*spray* が動詞として使われる前の時期に当たる LModE 期の言語状況を検討した。具体的には、Pinker (1989) などでも分類されている *spray* クラスの動詞の LModE 期における使用の状況を観察し、同じ *spray* クラスに分類されている動詞の LModE 期における使用状況はそれぞれで異っているものの、*sprinkle* や *splash* のようにどちらの交替形とも比較的バランスよく共起する動詞もあり、このような多様な動詞の存在が *spray* の所格交替動詞としての使用につながった可能性を指摘した。

講師 6 : 時崎久夫 (Hisao Tokzaki; 札幌大学) ・ 桑名保智 (Yasutomo Kuwana; 旭川医科大学)

膠着性に関する含意的普遍性

(Agglutinativity in implicational universals)

「ある言語が A の特性を持てば、その言語は B の特性を持つ」という含意的普遍性 (implicational universal) として観察されてきたものには、膠着性 (agglutination) に関わるものがある。Frans Plank らによる The Universals Archive には、これまでの研究で指摘されてきた、膠着性に関わる 27 の普遍性が集められている。代表的なものとしては、「ある言語が目的語-動詞の語順をとれば、その言語の形態は膠着的である」(Lehmann 1973) がある。語順の他にも、膠着性は、母音調和やピッチ・アクセント、境界表示的強勢、接辞の長さ、文法性を持たないこと、名詞類を持つこと、などとの相関が指摘されてきた。

この発表では、音韻・形態・統語の全体的類型論から、これらの含意的普遍性の正当性を検討し、正当と考えられる普遍性について、生成文法の枠組みを用いて理論的に説明した。結論としては、語頭に強勢を持つ言語は、外在化の際に主要部後置の語順で接続の強い左枝分かれの構造となり、それが膠着性や母音調和などを生じさせる、ということ論じた。

講師 7 : 高橋康徳 (Yasunori Takahashi; 神戸大学) ・ 陳凱僑 (Chen Kaiqiao; 神戸大学)

広東語とベトナム語における離合詞の「他動性」比較：言語内拡散と言語間借用の差異

(Transitivity of verb-object compounds in Cantonese and Sino-Vietnamese)

本発表では、離合詞という語彙グループの「他動性」について広東語とベトナム語の振る舞いを比較する。離合詞とは中国語に存在する語彙グループで「動詞+目的語」という構造を取る（例：「分類」「辞職」）。この語構造のため離合詞は目的語をさらに後続することに強い制限が働いていたが、近年の普通話（北京語）研究では「目的語を後続できる離合詞」の例が複数指摘されている。一方、中国南方で使われる広東語では離合詞の目的語後続が北京語よりも容認されず、北京語が主導する文法変化がそれほど波及していないことを陳（2022）が指摘した。逆に Takahashi (2022)は、中国語からベトナム語に借用された離合詞は北京語よりも目的語後続の制限が緩いことを示した。

以上のことは、言語内拡散（北京語→広東語）と言語間借用（中国語→ベトナム語）では離合詞の他動性について全く逆の作用を持っていることを示唆するが、広東語とベトナム語の振る舞いについて調査条件を揃えた比較は未だに行われていない。そこで本研究では条件を揃えた調査を行い、広東語とベトナム語で離合詞の他動性にどのような差異があるのかを詳細に考察した。

講師 8：杉崎 鋤司 (Koji Sugisaki; 関西学院大学) ・小川 芳樹 (Yoshiki Ogawa; 東北大学)

日本語における右方周縁部の獲得：自然発話分析に基づく予備的研究

(The Acquisition of Right Periphery in Japanese: A Preliminary Study)

本研究は、CHILDES データベース (MacWhinney 2000) に含まれる日本語を母語とする幼児の自然発話コーパスを詳細に分析することにより、母語獲得に対する UG の関与に対し、日本語獲得から新たな証拠を提示した。具体的には、日本語の埋め込み文を導く補文標識である「か」および「と」との間の語順に焦点を当て、日本語を母語とする幼児が(1a)のような補文標識の正しい順序を伴った埋め込み文を含む発話を示す一方で、(1b)のような誤った順序を伴った埋め込み文を含む発話を行わないという事実を明らかにした。この事実は、日本語の右方周縁部の階層構造が UG の属性によって制約されているとい

う Saito (2012)の分析の予測するところと合致するものであることを主張した。

(1) a. 太郎は [CP 花子が学校に来るか] 聞いた。

b.*太郎は [CP 花子が学校に来るとか] 聞いた。

講師 9 : 岸本秀樹 (Hideki Kishimoto; 神戸大学)

「なぜ」疑問文の特異性について

(On the peculiarity of *naze* questions)

通言語的に WH 疑問詞のうち、*why* は特殊な振る舞いをするのが知られている。本発表では、Ko (2005)で提案された日本語や韓国語のような Wh-in-situ 言語において、*why* (日本語では「なぜ」) が (主節において) [Spec, CP]に基底生成されるという提案を批判的に検討した。本論では、主に日本語を用いて、*why* (「なぜ」) は [Spec, CP]に基底生成されるのではなく、TP 内から CP へ非顕在的な WH 移動を起こすことを示す。より具体的には、WH 疑問を形成することができる領域が TP より下位の投射であることを WH 疑問化と分裂文の事実から確認した。さらに、「なぜ」が非顕在的に移動することにより優位性の効果を示すという新たなデータを提示した。これらのデータから、「なぜ」が [Spec, CP]に現れるのは非顕在的な移動の結果であって、この位置に「なぜ」が基底生成されることはない」と主張した。